「そこには必ず愛がある」
（マルコによる福音書 2:23-28）

イエス様の時代、厳格なユダヤ教徒であるファリサイ派を中心に、人々は律法を実生活に落とし込み、より細分化した規則を作り、それを守ることで神様のみ心に叶う生き方を目指しました。しかし、規則を守ることにばかり専心するうちに、律法に込められた神様の思い、愛を見失ってしまいました。結果的に、せっかく神様が与えてくださった律法を、人は互いを裁く道具にしてしまいました。その人々に向かってイエス様は、「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」という言葉をかけたのです。

安息日とは、神様が世界を創造された七日目にお休みされて、すべての被造物を祝福された日のことです。ですから本来、安息日は神様がわたしたちすべての命を祝福してくださっていることをあらためて感じ、疲れてしまった命を神様の祝福で再び満たしていただく日です。神様は人のことを愛し、すべての命を大切されるからこそ、十戒のなかでこの安息日を守るようにと定めてくださいました。み言葉や掟と言われるものすべてに、神様の愛が込められています。そこにある愛を確認しながら歩んでまいりましょう。